

## 黙示録1章 「イエス・キリストの黙示」

### 1A 証しのことば 1-8

1B ヨハネの証し 1-3

2B イエスの証し 4-8

1C 教会への挨拶 4-6

2C 世界への再来 7-8

### 3A 栄光のイエス 9-20

1B 後ろからの大きな声 9-11

2B 燭台の真中で輝かれる方 12-16

3B よみがえられた方 17-20

1C いのちの支配 17-18

2C 教会の掌握 19-20

## 本文

黙示録1章を開いてください。早速、中身に入りましょう。

### 1A 証しのことば 1-8

1B ヨハネの証し 1-3

<sup>1</sup> イエス・キリストの黙示。神はすぐに起こるべきことをしもべたちに示すため、これをキリストに与えられた。そしてキリストは、御使いを遣わして、これをしもべヨハネに告げられた。

私たちは前回、黙示録全体を概観する学びで、「イエス・キリストの黙示」について見ました。黙示とは啓示のことで、「覆われていたものが、取り除かれる」という意味です。この方の栄光のありさまが、これまで隠されていたこともすべて現れるということです。

そして、神は「**すぐに起こるべきこと**」を示されます。ここで、「約二千年前に、『すぐ』と言っても、かなり昔ではないか？」という人たちがいます。また、すぐに起こるとして、一時期、熱狂的に、キリストの再臨を待っていたけれども、何も起こらず、失望して、すぐにでも主が来られるという教えに反対している人々もいます。日本ではどうやら、1980年代頃にそうした動きがあったようです。

これらは、「すぐ」の捉え方を間違っていることから起こっています。これは「速やかに」という意味です。一度、起こり始めたらすぐにやって来るということです。同じ言葉がルカ18章8節で使われています。「あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。」ちょうど、ドミノ倒しのように、ドミノを立てていくのは、ものすごい時間を要しますが、一つを倒した

ら次々と倒れていくように、主が速やかに、一連の出来事を起こしていかれるということです。

私たちは、このような切迫性をよく知っています。地震や津波です。地震が起きれば、たとえその速報があっても、できることは数秒前の備えです。そして南海トラフ地震とか、首都直下地震とか、何年も前から予測されています。そして、いつくるか分からないから備えているように、と言いますね。なぜなら、一度起こったら、何もできないからです。前もって備えて、いつでも来てもよいようにするのです。これが、主が今にでも来られるという時の切迫性です。

そして、神がキリストにこのことを示され、そしてキリストがこのことを御使いたちを遣わして、それからヨハネに告げられています。黙示録には、御使いたちがヨハネに伝える姿が数多くでてきます。ところで、この「告げる」という言葉のギリシア語は、「しるしや象徴によって、明らかにする」という意味合いがあります。実体あるものを、しるしによって伝えます。

日本語だと表象、英語ではシンボルと言いますが、例えば、イエスが子羊として出てきます。悪魔は竜です。このような表現を、難しい言葉で「黙示文学」と言いますが、聖書では、エゼキエル書、ダニエル書、ゼカリヤ書などに数多く出てきます。どんな意味かがよく分からないと、苦手意識が出てくるかもしれませんが、子供たちが CS ルイスの「ナルニア国物語」を見るように、一見、抽象的に聞こえる神の出来事を、目に見える分かり易い寓話で知るような手法です。ライオンの格好をしたアスランは、ユダの獅子であるキリストを示しているとか、です。視聴覚教材で、知っていくのと似ています。

<sup>2</sup>ヨハネは、神のことばとイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてのことを証した。

使徒ヨハネは、「証し」という言葉を数多く使います。まず、神の語られたこと、神のことばを証しました。それから、彼の見た、聞いた、また手で触ったこともあるイエス・キリストを証します。そして、私たちも、イエスご自身から、聖霊の力によって、わたしのことを証するのだと、命じられています(使徒 1:8 参照)。

証し、あるいは証言ということと考えますと、まずは、自分が聞いた。自分が見た、ということですね。私たちが、神のことば聞いた。そして、イエス・キリストご自身を知ったということがあります。そして次に、そのことをしっかりと、良心をもって他の人の前で話していきます。これが、証しです。例えば、前の世代の人たちが戦争を経験したら、そのことを知っている人が証しをしていくことによって、初めて他の人がそのことを知るすることができますね。

その時に、聞く人々にとっては不都合な事実であるならば、そのことを語るのは勇気が要ります。みな白だと思っているところで、実は黒なんだと証言すれば、反発が来るのは必至です。それ

が、神のことばと、イエス・キリストの証しには付き物です。「証し」のギリシア語は、μάρτυς(マルトユス)であり、英語ですと殉教者を示す言葉 martyr になっています。このことを証言したら、死んでしまうかもしれないという危険と覚悟が必要だということです。しかし、このことを語らなければ自分は偽り者になってしまう。その良心のゆえ、人の前で証しするのです。

<sup>3</sup> この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを守る者たちは、幸いである。時が近づいているからである。

黙示録には、「幸い」の約束があります。一つに、「朗読する」ことです。黙示録というと、その意味するところを、暗号を解くかのように読み解くのが中心と思えるかもしれませんが。けれども、私たちが午前礼拝で詩篇を朗読するのと同じように、これを声に出して読むところに幸いがあります。パウロも、テモテに勧めていました。「1テモテ 4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。」勧めや教えも大事ですが、その前に、朗読するということはとても大切です。

ところで、ヨハネが書き記した黙示録は、今の西トルコにあたるアジアの、七つの教会に回覧されることになります。当時の書物は、今のような印刷技術がないですから、長老や教師が、会衆に読み聞かせることが、今よりも多かったと思います。彼らがそれらを聞いて、暗号を解くような難解なことが書かれていたと想像するのは難しいです。彼らが、この預言のことばを聞いて、心にすぐに入って来るようなものであったはずです。この書物は、ユダヤ人にとっては旧約聖書の引用が多くて、すぐに心に入ってくるものばかりです。同時に、当時、アジアに住んでいる人々にとっても身近な表現が数多く出てきます。言い換えれば、私たちが、この啓示を受け取っている人々のことを知れば、その意味するところは難しくない、ということです。

聞くだけでなく、「そこに書かれていることを守る」とあります。聞いたら、それをしっかりと心に留めることが必要です。「保持する」と言ったほうがよいでしょう。例えば、私たちがダムを管理する作業員だとしましょう。ダムの水を、どんなことがあっても管理して、洪水を防ぎ、また水道への供給を絶やすことはありません。いざという時に備えるために、心に留め、守るのです。パウロはテモテに、「2テモテ 1:14 自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」と言いました。

「時が近づいているからである。」とありますここで使われている「時」はカイロスです。ギリシア語にはクロノスという言葉もあります。「クロノスというのは、時計などで計ることができる時間です。今日は3月2日であるとか、何時何分であるとか、1時間は60分であるとか、そういう物理的、客観的な時間です。都会の人はほとんどこのクロノスに24時間縛られています。今は何時だから起きる、何時に会社に行く、何時だからお昼を食べる、何時だから寝なければならない、とか。

しかし、地方の農村や漁村の人は、今日はしげだから漁は休みだとか、今年は暖かいから早めに収穫の時期がきたとか、必ずしもクロノスに支配されているわけではないのです。このような時機(時に機会と書いて)を、カイロスと言います。イエス様は弟子たちに、サマリアの女が町の中に行き、ご自身のことを伝え、サマリア人たちがイエスを信じましたが、こう言われましたね。「ヨハ 4:35 あなたがたは、『まだ四か月あって、それから刈り入れだ』と言ってはいませんか。しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。」これが、カイロスです。しるしを見て、行動に移すのです。今がどういう時かを知るのです。そして行動に移して、神のみこころを行います。

## 2B イエスの証し 4-8

ここまでが前置きでした。次に、他の使徒たちの手紙と同じように、挨拶を始めます。

### 1C 教会への挨拶 4-6

<sup>4a</sup> ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。今おられ、昔おられ、やがて来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、<sup>5a</sup> また、確かな証人、死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにあるように。

ヨハネから、「アジアにある七つの教会」に対してです。聖書で「アジア」と出てくる時に、それはローマ帝国におけるアジアであり、今のトルコ西部に当たります。ローマのアジア属州と呼ばれます。今でも、トルコのイスタンブールでは、ボスポラス海峡を挟んで、左、西側をヨーロッパ、右、左側をアジアと呼びます。

七つの教会ですが、事実、七つの町にある教会があります。同時に、英語ですと the seven churches となっており、定冠詞 the がついています。事実、アジア地方には、七つの町以外の町にも教会がありました。例えば、コロサイの町にも教会があります。物理的に七つの教会だけでなく、もっと大きな意味があるようです。

「七」の数字が、黙示録に、そして聖書全体に数多く出てきます。それらを眺めると、七は神の数字であり、完全や全てという意味を持っているようです。2章と3章に、七つの教会のそれぞれにイエスが語られています。最後は、「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」とあり、その地域教会のみならず、教会全体に御霊が語られていることが分かるのです。ですから、黙示録は、当時の教会全体に語られている言葉であり、歴史を通じてすべての教会に対して、主が語っておられると考えてよいでしょう。私たちの教会も含めて、です。

そして、恵みと平安を祈っていますが、三位一体の神からの恵みと平安です。「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」が、父なる神。そして、「その御座の前におられる七つの御霊」が聖霊、

そして、イエス・キリストです。

神が、「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」というのは、永遠性を表しています。神は今、私たちと共におられます。そして同じ方が、初めから、昔からおられます。だから、私たちは昔に書かれたことが、今の私たちに、神が語られるのを知っています。そして大事なのは、「やがて来られる」ということ、将来も支配されているということです。

多くのキリスト者が、昔に働かれた神、そして今働かれている神について知っていても、これからは違うと考えます。いつの間にか、これからは違うのだとするのです。しかし、「ヘブル 13:8 イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。」聖書の昔の記述を信じて、今も働いていると信じているのに、将来の希望についての神の語られていることを、そのまま信じないで、今の人々の考え方を優先しているならば、それは間違いです。

そして、「その御座の前におられる七つの御霊から」ということですが、七つの教会と同じく、この「七」は完全を示すものです。そして、これはゼカリヤの預言から来ているものです。主が、帰還したユダヤ人に勇気を与えるために、大祭司ヨシュアと総督ゼルバベルそれぞれに預言しました。ヨシュアについて、彼の前に「3:9 見よ、わたしがヨシュアの前に置いた石を。一つの石の上には、七つの目がある。見よ、わたしはそれに文字を彫る。」と言っています。この石は、偉大な大祭司キリストの来られる預言です。その石には七つの目がある、と預言していますね。そして、ゼルバベルに対する預言として、「4:6 これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。」と言われるのです。オリーブの木からの油は、主の御霊を示していました。

そしてゼルバベルに対して語られます。「4:10 だれが、その日を小さなこととして蔑むのか。人々はゼルバベルの手にある重り縄を見て喜ぶ。これら七つは、全地を巡る【主】の目である。」七つの灯皿の油は御霊のことを示しており、それは全地を巡る目であり、先のヨシュアに対する預言、「石の上にある七つの目」であります。そして黙示録 5 章 6 節を読みます。「また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立っているのを見た。それは七つの角と七つの目を持っていた。その目は、全地に遣わされた神の七つの御霊であった。」このようにつながっているのです。

そしてイエス・キリストについてですが、この方の紹介が、最も長くなっています。ここ 5 節から 6 節の最後まで続いています。

初めに、イエスが「確かな証人」であられます。ヨハネは、イエスを証したのですが、イエスご自身こそが忠実に父なる神を証しされました。父なる神が語られることを語り、御父がされること



のみを行ない、父なる神と一つであるし、一つとなって動いておられました。「わたしを見た人は、父を見たのです。(ヨハネ 14:9)」と言われました。

そして、「死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者である」とあります。午前礼拝でお話ししましたように、ここで「生まれた」というのは、よみがえったことです。しかも、神の御子として現れたという意味です。「最初」というのは、筆頭にと言い換えてよいでしょう。この方を信じる者は、死んでも生きるという約束があります。

そして、御子として現れたのだから、この方が地上の王たちの支配者となります。詩篇の第二篇がその背景です。このお姿が、黙示録では前面に出てきます。国々の王を支配する獣が現れます。獣が世界を牛耳り、支配します。また、獣の上には、地の王たちと淫行を働く大淫婦バビロンがいます。この女を滅ぼし、また、獣が率いる世界の軍隊を、ご自分の口から出る剣によって滅ぼされます。そして、鉄の杖をもって牧します。そしてこれが、当時、世界の超大国であるローマ帝国の支配の中で、与えられた啓示なのです。

<sup>5b</sup> 私たちを愛し、その血によって私たちを罪から解き放ち、<sup>6</sup> また、ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。

キリストのお働きが続けて、書かれています。主は私たちを愛してくださいました。どれほど愛されたか？という、血を流して、その罪を清めてくださったのです。そして、キリストの流された血は、私たちの良心を清めてくださったので、私たちが自由に神に従うことができるようになりました。私たちが神に従うことによって、私たちは罪の支配から解き放たれています。そして、後に、主が来られたら私たちは栄光の姿に変わり、罪なきからだを着せられます。

そして、主が地上に来られた、ご自身が王の王、主の主として世界を支配される時、私たちは、この方と共に世界を統べ治めます。御国を受け継ぎます。その時に、「ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった」とあります。これはかつて、シナイ山のふもとで、主がイスラエルに対して与えられた約束です。祭司の王国とも訳すことができます。私たちは、神と人との間を取り持つ祭司となっています。神の恵みを受けて、その祝福を人々に分かち合うのです。そして、祭司たちが主に仕えることによって、主が全体を支配することになります。この恵みによる支配を、祭司の王国と呼びます。

今、私たちの周りには、まだイエス様を知らない人がいます。自分がいなければ、その人はキリストについて知る由もないということがあるでしょう。その時に、キリストに会って生きる自分が、その人にとってキリストの支配がはじまるのです。

## 2C 世界への再来 7-8

こうして、三位一体の神からにある、恵みと平安の挨拶がありました。次に、黙示録の中でクライマックスとなる出来事、主の再臨を宣言します。

<sup>7</sup> 見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は 彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。

イエスが、オリーブ山で弟子たちに語っておられました。「ルカ 21:27 そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」ダニエルの預言によって、この方が雲に乗られて、栄光を帯びて戻ってこられることが予告されていました(7:13)。

なぜ、雲と共に来られるのでしょうか？ノアが、箱舟から出てきた時に主は、「創 9:14 わたしが地の上に雲を起すとき、虹が雲の中に現れる。」と言われました。天における神の栄光の輝きがあって、それが地上に臨みます。エゼキエル書 1 章において、ケルビムの上に乗っておられる方が、「その方の周りにある輝きは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、まさに【主】の栄光の姿のようであった。(28 節)」とあります。そして、幕屋や神殿では、栄光の雲が宮に満ちました。

そして見る人が、「すべての目」であることを強調しています。誰もが主イエス・キリストの裁きを免れることはできません。また、終わりの日には感わしがあり、キリストがここにきているという噂が立ちますが、出て行ってはいけないとイエス様は言われました。そして、こう言われます。「マタイ 24:27 人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくのと同じようにして実現するのです。」

そして、「彼を突き刺した者たちさえも。」と言っています。彼を突き刺した者とは、ユダヤ人たちのことです。ご自分の民のためにこの方は来られたのに、受け入れませんでした。ゼカリヤの預言には、世界の国々がエルサレムに攻めてくること、そして主ご自身が戦われることが書かれています。その姿を見て、エルサレムの住民とイスラエル全土が悲しみ嘆くことが書かれています。「12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」

<sup>8</sup> 神である主、今おられ、昔おられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

アルファはギリシア語の最初の文字で、オメガが最後の文字です。「最初であり、最後である」と言われているのと同じです。イザヤの預言に、何度となく出てきます(44:6 など)。そして、17 節でイエス様が、ご自身が初めであり、終わりであると言われます。全能者である神とご自身を一つに

しておられるのです。すべてを通じて、イエスこそが神であり、全能者であることを証しています。

### 3A 栄光のイエス 9-20

そしてヨハネは、自分に対して栄光の主が現れたことを証します。

#### 1B 後ろからの大きな声 9-11

<sup>9</sup> 私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり、神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。

ヨハネが手紙の中でもそうであったように、へりくだりと心の暖かさが伝わってきます。「あなたがたの兄弟で」と言っています。彼は長老であります。キリストにあって兄弟なのです。そして、「あなたがたとともに」と言っています。教会として通っている苦難に、私もともにあずかっています。とうことです。苦しみというのは、人を近づけます。一つにしていきます。

「イエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者」と言っています。ダニエルの預言にも、永遠の御国の約束があるけれども、その前に聖徒たちが苦しみを経ることが書かれていますパウロが、むち打ちにあって牢屋に入りましたが、出てきた後に、ピリピの人々に「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない(使徒 14:22)」と言いました。教会は、皇帝ドミティアヌスによる迫害の波の中にいました。今、御国に入る希望のために、苦しみを経ているのだという励ましが必要でした。そして、信仰によって忍耐する必要があることを教える必要がありました。

そして、「神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた」と言っています。政治的な理由でもなく、神のことばを伝え、イエスの証しをしている中で、パトモス島にいました。使徒たちの弟子、使徒教父による伝承によりますと、彼は煮えたぎった油の大釜の中で入れられました。ところが奇跡的が起きました。それでも死ななかつたのです。それでパトモス島に島流しになって鉱山で強制労働をさせられていたと言われています。そしてパトモス島は、小アジアのエペソから約50キロ沖にある島ですが、当時は茨と岩の島でした。独自の水源はなく、食糧も乏しく、日差しが強い厳しい所でした。おそらく強烈な孤独感と無力感の中に彼はいたことでしょう。そこで、主の啓示を受けたのです。

イエス様は、義のゆえに迫害される者は幸いであると言われましたが、私たちが嫌なことをされる時に、それは純粋に、義のゆえ、神のみことばや、イエスの証しのゆえでなければ、そこには霊的な意味はありません。自分の仕事がきちんとしていなくて上司から怒られたのは、迫害とは呼びません。それから、本当に義のゆえに迫害されている時に、気落ちする必要はないということです。むしろ、主の御手の中で起こっていることとして安心する必要があります。パウロが、ローマで鎖につながれている時に、気落ちしているエペソの教会の人々に、「キリスト・イエスの囚人となって



います。(3:1)」と言いました。ローマの囚人ではなく、イエスご自身の囚人なのです。

<sup>10</sup> 私は主の日に御霊に捕らえられ、私のうしろにラッパのような大きな声を聞いた。

「御霊に捕らえられ」ました。圧倒的な、抗うことのできない御霊の力が彼に臨みました。これは、預言者エゼキエルがすでに経験していたことです。霊が彼の中に入って、他のところに引っ張られていたり、また霊が入って、立ち上がったりました。そして、御霊によってエルサレムまで連れていかれ、神殿の中で人々が偶像礼拝をしている姿も見たのです。

そして、それが「主の日に」にあったとあります。これは、主の日に臨んで、というような意味合いです。主の日というと、日曜日のことだと思える人もいます。確かに、新約聖書には、聖霊が降ったのが五旬節の満ちた日が日曜日であったし、彼らが集まってパンを裂いたのが、「週の初めの日(使徒 20:7、1コリント 16:2)」であることが書かれています。

しかし、主の日という言葉は圧倒的に「神が地上に怒りを下し、ご自分の正義と平和を地上に確立される日」として描かれています。例えば、ヨエルの預言にはこう書いてあります。「1:15 ああ、その日よ。【主】の日は近い。全能者による破壊の日として、その日は来る。」新約聖書でも、同じです。(1コリ 5:5、1テサ 5:2、2テサ 2:2-3、2ペテ 3:10)そして、何よりも、これから黙示録を読めば、終わりの日のことを指していることは明らかです。ですから、ヨハネが、終わりの日、主の日の幻の中に御霊によって捕えられていったということです。

その証拠に、「ラッパのような大きな声を聞いた」と言っています。元々は、主が天から降りてこられて、その聖さ、また栄光と威光の力を示されたのは、シナイ山においてでありました(出 19:16)。またラッパの音は、民を招集する時や戦いに臨む時にも、吹かれます。そこで新約聖書では、主が天から降りて来られる時、私たちが空中に引き上げられる時に聞こえるものです(1コリ 15:52、1テサ 4:16)。

<sup>11</sup> その声はこう言った。「あなたが見たことを巻物に記して、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアに送りなさい。」

パトモス島に流刑されていたヨハネは、ドミティアヌス帝の死後、新しい皇帝になった時に釈放されて、おそらくエペソに戻ったものと思われます。そこで彼は、自分の聞いたこと、見たものを書き記したのでしょう。あるいはパトモス島で書き記したものを、エペソでその巻き物を回覧するように命じたのかもしれませんが。

教会ですが、エペソからスミルナ、スミルナからペルガモン、ティアテラ、サルデス、フィラデルフィア、そしてラオディキアの順番に、イエス様が2章と3章で御使いによって言葉を与えられます。黙示録が回されたのも、この順番だったのでしょう。

これら七つの教会の町の多くは、ローマにおいて非常に大きい都市でありました。そして、それぞれがローマの街路によって太い環状線がありました。地図で見ると、三角形になっています。



## 2B 燭台の真中で輝かれる方 12-16

<sup>12</sup> 私は、自分に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。

<sup>13</sup> また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。その方は、足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。

主イエスご自身の神々しいお姿です。ヨハネにとってこれが初めての経験ではありません。高い山に連れて行かれた時も、そうでした。主は、高い山にペテロとヨハネとヤコブを連れて、そこで神々しい姿をお見せになります(マタイ 17:2)。これが、天の御座におかれる御子の姿、その栄光であります。イエス様は、十字架に付けられる直前、御父に対して、「ヨハネ 17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」と祈られました。その栄光です。

まず主は、七つの教会を「七つの金の燭台」としてお見せになっています。燭台は、幕屋や神殿において祭司たちが仕える聖所において、その中を照らす重要な役割を担っています。聖所に光を燭台が与えたように、イエスご自身がその光の真ん中におられるということです。迫害を受けている教会、この世から圧迫を受けている教会にとって、この真理はなんという慰めでしょうか！また、生ぬるくなっている教会にとっては、主が真ん中におられるということは警告です。

主は、ご自身を「人の子のような方」として現しておられます。ここがダニエルの預言からのもので、先に、雲と共にこられる預言について話しましたが、その中に出できます。「7:13-14 私がまた、

夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」大祭司カヤパの前で、そのことを告白され、死刑判決が下りました。そして、御父から裁きを行なう権威を与えられ、そして主権と力、光栄をもって御国を立てられることを、この「人の子」の称号には含まれます。

そしてこのダニエル書に、ヨハネが見たのと同じような姿で、ダニエルに現れた主の使いの姿があります。「10:5-6 私は目を上げた。見ると、そこに一人の人がいて、亜麻布の衣をまとい、腰にウファズの金の帯を締めていた。そのからだは緑柱石のようで、顔は稲妻のよう、目は燃えるたいまつのもようであった。また、腕と足は磨き上げた青銅のようで、彼の語る声は群衆の声のもようであった。」主イエスご自身が、ダニエルにも現れたと考えられます。

「足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。」とあります。主ご自身は偉大な大祭司です。足にまで垂れた衣は、祭司的な姿を現しています。胸には金の帯が締めてあります。これは王たる神の輝きを示しているのでしょうか。その威光に満ちた姿が、詩篇 93 篇に証しされています。「93:1 【主】こそ王です。威光をまとしておられます。【主】はまとしておられます。力を帯とされまます。まことに世界は堅く据えられ揺るぎません。」

<sup>14</sup> その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は燃える炎のもようであった。

主の真っ白な頭髪は、全く汚れたところのない、聖なる姿を表しています。神の御座の幻が、ダニエルの幻にあります。「ダニ 7:9 私が見ていると、やがていくつかの御座が備えられ、『年を経た方』が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭髪は混じりけのない羊の毛のよう。」とあります。この髪が年老いて白髪なのか、と誤ってしまいますがそうではなく、永久まで生きられる方が、全く純潔な方であられる、ということです。そして「その目は燃える炎」とあります。これは、全てのことを見通す鋭い目のことを示しています。主が教会の中におられるのですから、主は燃えるような火で、その妬むような愛で、私たちを見つめておられます。

<sup>15</sup> その足は、炉で精錬された、光り輝く真鍮のようで、その声は大水のとどろきのもようであった。<sup>16</sup> また、右手に七つの星を持ち、口から鋭い両刃の剣が出ていて、顔は強く照り輝く太陽のもようであった。

足の真鍮の姿は、はエゼキエル書 1 章にあるケルビムの姿、さらにその上に座す主ご自身の姿と重なります。主が地上に裁きを行われ、ことごとく諸勢力を制する姿であります。

それから、「大水のとどろき」の声ですが、この方の威厳を示しています。御声が全地に鳴り響いていることを意味しています。詩篇 93 篇には、こうあります。「93:3-4【主】よ川はとどろかせています。轟音を川はとどろかせています。激しい響きを川はとどろかせています。大水のとどろきにまさり力強い海の波にもまさって【主】は力に満ちておられます。いと高き所で。」

そして、「右手に七つの星を持つ」っておられるとあります。この七つの星は、七つの教会の御使いであると後で主が解き明かされますが、つまり教会をご自分の力ある手で握っておられるということです。私たちの集まりも、主がこのように握っておられます。

そして、「口から鋭い両刃の剣が出ていて」います。これは、主ご自身の御言葉の強さです。剣にもいろいろな種類があります。ここのギリシア語では、「トラキア人が使った幅広く長い大剣」ということです。当時のギリシア系の人々が戦った時の武器で使われており、主が諸国の民に戦われる時に鋭い剣が出ている様子が描かれています(19:15)。

そして、「顔は強く照り輝く太陽」です。先に読んだ、イエス様の変貌の時にも太陽のような輝きがあったとありました。これが神ご自身の輝きであり、主ご自身の麗しさとも言えるでしょう。イエス様はマラキ書では、「義の太陽(4:2)」と呼ばれています。ですから、教会は燭台、御使いは星がありますが、イエス様は太陽であります。

### 3B よみがえられた方 17-20

このようにして栄光のお姿で現れたイエス様ですが、今度は、ご自身が確かに生きていと証言しておられます。

### 1C いのちの支配 17-18

<sup>17a</sup>この方を見たとき、私は死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。

ダニエル書 10 章で、主の使いがダニエルに現れた時に、ダニエルも気を失ってしまいました。このようにして、主ご自身に会うことは、圧倒的な聖なる方に会うことであり、心の奥底からへりくだり、ひれ伏すように導かれます。

<sup>17b</sup>すると、その方は私の上に右手を置いて言われた。「恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、<sup>18</sup> 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とよみの鍵を持っている。

主が右手を置いてくださっています。ダニエル書 10 章においても、御使いが触れて、立ち上がらせてくれました。そして、恐れることはない、と言われます。御使いはダニエルに、愛されている者

よ、と呼びかけましたが、ここでも、主がヨハネを愛しておられることが伝わってきます。

そして主は、「わたしは初めであり、終わり」と言われます。イエス様が永遠なる方で、あらゆることに主権を持っておられ、全てを動かしておられる支配者です。

そして大事なイエス様の発言があります。「生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。」と言われます。午前礼拝でお話ししましたように、主は、一度死なれましたが、よみがえり、そして今も生きておられるということです。ヨハネの時代には、イエス様が昇天されてから既に60年以上経っていて、イエス様は果たして生きているのか？という実感が湧かない状況だったのではないのでしょうか？そこで主が今も生きておられる方として現れてくださいました。

それから、「死とよみの鍵を持っている」と言われます。死に対しても、死後の陰府に対しても、力と権威を持っているということです。これが教会に与えられた権威と力であり、悪しき霊どもの力に対しても、私たちは足で踏みつけるようにして、信仰をもって征服していきます。教会が、どんな時代にあっても、どんな困難があっても前進してきたのは、そのためです。

## 2C 教会の掌握 19-20

<sup>19</sup> それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ。

ここは、黙示録全体の構成を把握するのに、鍵となる重要聖句です。黙示録は、三つの部分に分けることができます。一つは、「あなたが見たこと」です。ヨハネは今、天におけるイエスさまの栄光の御姿を見ました。ですから、1章を、「あなたが見たこと」に区別できます。そして、「今あること」は、イエス様がこれからみことばを送られる、教会の事です。黙示録2章と3章に書かれています。この2章分を、「今あること」として区別できます。

そして、教会のこの後に「この後起ころうとしていること」があります。4章1節をご覧ください。「ここに上れ。この後必ず起こることを、あなたに示そう。」とあります。今ある教会の後に起こることが4章以降に書かれています。ですから、4章から最後の22章までを、「この後起ころうとしていること」として括することができます。このアウトラインを頭に入れて、黙示録全体を読めば、大きな流れとして黙示録を読むことができます。

<sup>20</sup> あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について。七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

七つの燭台が教会、そして七つの星が御使いです。ここの「御使い」について解釈が分かれま  
す。「使者」とも訳すことのできるの、ここを教会に立てられた指導者、牧者と解釈する人たちも



います。けれども、御使いを示している同じギリシア語が使われています。これから黙示録全体で、御使いが権威と力が与えられて、いろいろなことを行っていきます。ですから、教会に対するイエスの言葉を、そのまま普通に解釈して、御使いであると考えでよいでしょう。

主は、このようにしてご自身を私たちの真ん中に置き、またご自身の手に入れておられます。